
ある少年と少女の物語

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少年と少女の物語

【Nコード】

N9750K

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

時代から取り残されたような、古い村。
その村長一家の息子・雅人は、家で働く小間使いの花に心惹かれる。

しかし花は雅人の母親にこき使われ、雅人はなんとか花を助けてやりたいと考えるのだが・・・

第1話 小間使い

「おはよう」

俺の声に、大きなダイニングテーブルについている父さんが軽く頷く。

父さんの向かいに座っている母さんは、にこやかに「おはよう」と返してくれたけど、

コーヒーの入ったポットを手にした「彼女」が近づいてくると、その表情はたちまち冷たくなる。

「奥様。コーヒーのお代わりはいかがでしょうか」

「・・・頂くわ」

彼女は小さく礼をしてから、母さんの空のカップにコーヒーを注いだ。

それから彼女は、席についた俺にも一礼し、

「雅人様、おはようございます。すぐに朝食とコーヒーをお持ちします」と言い、

キッチンへと下がっていった。

俺は、彼女の後姿を目で追った。

ショートカットに近い真っ黒なボブ。

髪が垂れてこないように、白いレースのカチューシャをしている。仕事の邪魔にならないようなのか、ずっとこの髪型だ。

それに、黒いワンピースに白いエプロン、黒いストッキング、黒い靴。

今なら、彼女のこの格好を見れば誰もがメイド喫茶なる物を想像するだろうけど、

そんな物が流行る前から彼女はいつもこの格好だ。

そもそも、この格好は外国の小間使いの制服のようなもの。

それを、最近日本で勝手に「メイド喫茶の衣装」だと持てはやしているだけだ。

・・・まあ、「誰もがメイド喫茶なる物を想像する」と言っただけ、この村の人間は想像しないだろう。

いや、できないだろう。

俺、野波雅人のなみまさひとは、この岡部村おかへの村長である野波雅信のなみまさのぶの1人息子だ。

野波家の「お坊ちゃま」として19年、何不自由なく暮らしてきた。

父さんは村のみんなから「旦那様」と恐れられ、

俺はその息子として一目置かれている。

子供の頃から学校ではいつも特別扱いだった。

「旦那様」に睨まれたら、この村じゃ暮らしていけないからな。

実際には父さんは優しい人なんだけど、村人には父さんの本当の顔は分からない。

なら、こんな村から出て行けばいいだろう、と思うかもしれないが、この村で生まれ育った者は、この村以外で生活することなんて考えられない。

ここの村人にとっては、この村こそが全世界で、それ以外の土地など、存在しないも同然なんだ。

もちろん、この村にだってテレビというものがある。

それを見れば、都会での生活がどんな物か、一目でわかる。

でもこの村人たちは、それをまるで宇宙の彼方の出来事のように思っている。

自分達には関係ない、

自分達はこの村から出ることはない、

都会なんて恐ろしい所に行きたいとも思わない！

ここは、そんな閉鎖された村、時代から取り残された村なんだ。

俺もずっと、ここでの暮らしに何の疑問も不満もなかった。

俺はここで生まれ、ここで育ち、ここで許婚いいなすけと結婚して、ここで子供を作り、

ここで年老いて、ここで死んでいく。

俺の先祖がみんなそうだったように。

ただ、一度、俺は父さんの遣いで東京というところに行ったことがある。

そこでは、俺と同じ年位の人間が、俺とはおよそかけ離れた生活をしていた。

俺ほど金は持っていないが、みんな楽しそうに、

合コンだ、デートだ、旅行だ、ドライブだ、と笑っていた。

俺の村ではあり得ないことばかりだった。

こんな、テレビの中のような生活が本当にあるのだと、驚いた。

でも、だからと言って、俺の日常が変わる訳じゃない。

岡部村に戻ると、いつも通りの毎日が俺を待っていた。

以前は、何の不満もなかった生活。

でも、一度東京を見てしまった俺は、ここでの生活をたまらなく退屈に思うようになった。

だけど・・・何も変わらない。変えられない。

俺は、野波家の、この村の、跡取りなんだ。

「雅人様。コーヒーをお入れしてよろしいですか？」

「あ、ああ」

いつの間にか彼女が俺の横に、ワゴンを持ってきていた。

その上には、トーストとサラダが乗った皿と、コーヒーカップ。

彼女の手には、さっきのとは違う、コーヒーが入ったポットがある。

彼女は慣れた手つきで、カップにコーヒーを注いだ。

母さんは猫舌で、湯気が出てるような熱いコーヒーが飲めない。
だから、母さんのコーヒーだけは別のポットに入れてあるのだ。

「ありがとう」

俺がそう言つと、彼女はまた一礼し、今度は父さんの空になったカップに、

俺と同じコーヒーを注いだ。

俺はその白くて細い指に見とれた。

彼女の名前は「花^{はな}」。

苗字も年齢も知らない。

「花」と言う名前が、本名なのかどうかも分からない。

聞けばいいのだけど、何故か母さんが彼女を毛嫌いしているので、気軽に声もかけられない。

花は、俺が物心ついた頃には、既にここで小間使いとして働いていた。

と言っても、その頃は花もまだ幼かった。

多分俺より年下だと思う。

そんな小さな花が、一生懸命料理や掃除をしている姿に、俺はいつの間にか心惹かれるようになった。

もちろんそんなことは、口が裂けても言えないが。

いつ、母さんが花をクビにするかもしれない、と思うと、俺は気がきじゃなかった。

それほどに、母さんは花を嫌っている。

「野波家で働く」ことは、この村の住民にとって憧れではあるが、「野波家を追い出された」となると、打って変わって村八分にされてしまう。

花をそんな目にあわせたくない。

だけど、結局花はクビになることなく、今もこうして野波家で働い

ている。

そういえば、花の家族はどこにいるんだろう？
この村のどこかにいるのか、それとも天涯孤独なのか。
でも、そんなことはどうでもいい。
花がここにいてくれさえすれば。

「花。コーヒーのお代わりもらえるかな？」
「はい、雅人様」

俺は、少し残ったコーヒーを一気に飲み干し、
カップを花に渡した。

「・・・花が淹れるコーヒーは美味しいね」
「ありがとうございます」

いつも無表情な花が、小さく微笑んだ。
それはまるで、白い百合のような笑顔だった。

第2話 開かずの間

2階にある自分の部屋に入ろうと、ドアノブに手を伸ばし・・・
俺は手を止め、廊下の奥を見た。

突き当たりにある部屋。

俺はそこに入ったことがない。

俺だけじゃない。

この屋敷にいる誰もが、あの部屋に入ったことがない。
鍵がかかっていて入れないのだ。

子供の頃、どうしてもあの部屋に入ってみたくて、
この屋敷にいる全員に「あの部屋の鍵を知らないか」と訊ねて回っ
たが、

誰も、お祖父さんや父さんも、持っていなかった。

でも、鍵を壊して入る勇気もなく、
俺はいつの頃からか、あの部屋を「開かずの間」と呼ぶようになった。

久しぶりに、開かずの間のドアノブを回してみる。

ガチ・・・！

やっぱり開かない。

この中には何があるんだろう？

まさか、死体が転がってる・・・なんてことは、ないだろうな？
この屋敷なら、そんなことがあってもおかしくないけど。

俺は諦めて、自分の部屋に戻ることにした。

すると、長い廊下の向こうから、花が大きなお盆を持って歩いてくるのが見えた。

「それ、お祖父さんのご飯？」

「はい」

お盆の上には、温かいお粥が乗っている。

「目が覚めてらっしゃるといいんですが・・・」

「そうだね」

俺のお祖父さんは、ここ数年寝たきりの生活が続いている。
意識も朦朧としていて、ろくに会話もできない。

だから、この家の実権は今父さんが握っている。

そして・・・父さんの次は、俺が握ることになる。

花が、俺の向かいの部屋を軽くノックして中に入っていた。

お祖父さんの世話は花が一人で全てやっている。

これこそ、嫁である母さんの仕事だと思うが、

母さんは自分がやりたくないことは、全て花にやらせる。
他にも小間使いは何人もいるのに、敢えて花にやらせるんだ。

花も、文句一つ言わず、一生懸命やっている。

なんであんなに頑張れるんだろう。

行くところがなくて、ここを追い出されたら困るからか？

母さんが花をどうして嫌ってるのかはわからないけど、
父さんも少しくらい花を助けてやったらいいのに。

お祖父さんが死んで、父さんが死んで、俺がこの家の当主になった
ら・・・

もっと花を大切にするのに。

だけど、そんな日が来るのは、何十年も先だろう。

それまで花が、ここで頑張ってくれているかどうかわからない。

いつそ、他に働ける所を世話してやった方が、花にとってはいいか
もしれない。

でも、それじゃあ俺は花に会えなくなる。
それは嫌だ。

その時。

お祖父さんの部屋から、小さな悲鳴がした。

・・・花の声だ！

「花！」

「ま、雅人様・・・大旦那様が・・・！」

俺は急いでお祖父さんが横になっているベッドに近づいた。
その瞼は固く閉じられている。

まるで、もう二度と開かないかのように。

「・・・花。父さんと母さんを呼んできてくれ。あと、医者も」
「はい！」

俺は、お祖父さんの顔にそっと触れてみた。

それはもうとつくに冷え切っていた。

野波家の当主が死んだ。

岡部村の一大事だ。

でも、幸いお祖父さんはもう第一線を退いてるから、お祖父さんが
死んだからと言って、

村が困ることは何もない。

それでも、全ての仕事や学校が休みになり、
村人全員がお祖父さんの通夜にやってきた。

父さんと母さんは神妙な面持ちでお祖父さんの棺の横に座っている。俺もその横で、ぼんやりと座っていた。

もちろん、悲しい。

でも、俺にとつてお祖父さんは、

自分のお祖父さんというより、岡部村の恐い村長というイメージが強い。

いつも怒ったような顔をしていて、俺は近づきにくかった。

だからお祖父さんの死は、悲しくもあり、少しホッとするものもある。

それは父さんと母さんも、そして村人達も同じようだ。

これからは、ちょっと頼りないけど優しい父さんが、名実ともに岡部村の村長になる。

「旦那様。広間の準備ができました」

花が父さんの後ろに両膝を突いて座り、小さな声で話しかけた。

「ああ、ありがとう。雅人、お前は広間の方にいて、客人の相手をしてくれないか」

「わかった」

花の言う「広間の準備」とは「通夜に来た客をもてなす準備」と言うことだ。

つまり、料理や酒の準備のことである。

俺が広間に入ると、既にそこにいた村人達は一応「この度は・・・」と暗い声で言ったが、

その顔はみんな酒で赤い。

だけど、俺はそれを失礼だとは思わない。

いくら野波家の当主の通夜とは言え、一老人が天寿を全うしたのだから、

そう湿っぽくなる必要もないだろう。

・・・そうだ。

俺はグラスを持つと、この村一番の古株に近づいた。

「栄太郎さん、今日はわざわざありがとうございますえいたろう」

「坊ちゃん。いえ、当然ですよ。残念でしたね」

栄太郎さんはこの村の生き字引だ。

俺のことも、生まれた時から知っている。

俺がいつどんな病気をしたか、母さんよりも詳しいだろう。

「お祖父さんは、もう97歳でしたからね。じゅうぶんに生きたと思います」

「そうですな」

栄太郎さんも他の村人に負けず劣らず赤い顔をしている。

でも、酔っ払って自分を見失うような人じゃない。

俺は、周りを気にしながら小声で訊ねた。

「栄太郎さん。うちの小間使いの花つて女の子、知ってますか？」
「ああ。さっき、この酒を持ってきてくれた子でしょう？」

そう言つて、一升瓶を持ち上げる。

俺は頷いて続けた。

「花の家族のことは知ってますか？」

「さあ。聞いたこと、ありません」

栄太郎さんが知らない、ということは、誰も知らないのだろう。
やっぱり花の家族はこの村にはいないのかもしれない。

「じゃあ、花はいつどこから来たんでしょうか？」

「詳しくはわかりませんが、わしが始めて花を見たのは・・・花が
よちよちと歩き始めた頃ですか？」

「つてことは、花が1歳くらいですか？」

「だと思えます」

そんな昔の花を知ってるのか！
さすがは栄太郎さんだ！

「その時、俺は何歳でした？」

「ああ、覚えてますよ。坊ちゃんが、足元がまだおぼつかない花の
手を引いて、

二人で池の周りを散歩してたことがあります。その時、坊ちゃんが
池に落ちて、大騒ぎになったんですよ。

だからあれは・・・坊ちゃんが5歳の時ですな」

栄太郎さんが、うんうんと頷く。
大した記憶力だ。

俺が5歳の時、花は1歳。
俺の4つ下・・・つまり、花は今、15歳ということになる。

それにしても、不思議だ。

栄太郎さんは、花が1歳の頃からこの村に・・・野波家にいたと言
う。

でも、家族のことは知らない。

じゃあ、誰が花を育てたんだ？

それに、どこで？

栄太郎さんも知らないこの村のどこかか？
それとも・・・まさか、野波家の中で？

いや、それはないだろう。

だって、野波家の人間でもない花をここで育てる理由はない。
育てる人もいない。

どこかで誰かが花を育て、ちよくちよく野波家に連れて来ていたん
だ。

そして、花は幼くしてここの小間使いになり、それ以来野波家に住
み込みで働いている。

不思議な女だ。

だけど・・・

俺は、弔問客らしい見知らぬ男と話している花を見た。

花が、どこの誰だろうと俺の気持ちは変わらない。

俺には親が決めた許婚がいるから、花と結婚できないのはわかってる。

でも、花を大切にすることはできる。

いつか、花の心からの笑顔を見たい。

第3話 コーヒー

屋敷の中の雰囲気が少し変わった。

お祖父さんは元々寝たきりで、家や村の運営に口出しすることはもうずっとなかったけど、

それでも、お祖父さんが生きているのと死んでいるのでは、心持がだいぶ違うらしい。

誰の心持かと言うと、お祖父さんの息子である父さん・・・ではなく、母さんのだ。

お祖父さんが死んで以来、母さんは伸び伸びしている。

元々やってもらえないお祖父さんの介護から開放された訳でもないのに。

とにかく、そんな母さんの機嫌のよさが、屋敷全体の雰囲気に影響している。

その一方で、落ち込み気味なのは花だ。

もう少し自分が早くお祖父さんの部屋に行っていて、

様子がおかしいことに気付いていれば、助かったかもしれないのに・・・と。

花がお祖父さんの部屋に行った時、お祖父さんは既に死後何時間も経っていたから、

花は何も責任を感じる必要なんてないのに、どうしても自分が許せないらしい。

まるでそれを挽回するかのようになり、今まで以上に一生懸命働いている。

それなのに、母さんは相変わらず花に冷たい。

俺もまさか、父さんが死ねばいいとは思っていないけど、早く当主になって、花を助けてやりたい。

そんな思いが日増しに膨らんでいったせいだろうか。

ある日、俺は庭掃除をしている花に近づき、こんなことを言った。

「花。頑張ってるね・・・たまには休んでどこかに出掛けたら？」

花は、すごく驚いた顔をした。

「いえ、大丈夫です。出掛けたいところありませんし」

「・・・じゃあ、俺がどこかに連れて行ってあげようか？」

「え・・・」

どこかと言っても、せいぜい隣町がいいところだ。

岡部村には電車はもちろん、バスも通っていない。

交通手段は自分の足か自転車か車くらいだ。

遠出しようと思ったら、隣町まで出て、そこからバスを乗り継ぎ、電車の駅までいかなければならない。

花はしばらく悩んでいたけど、申し訳なさそうに「じゃあ」と呟いた。

「お願いします。隣町で、少し買いたいものがあるんです」
「わかった」

俺と花はその日の午後、早速車で隣町へ出掛けることになった。

「買いたい物ってこれ？」
「はい」

花が入ったのは、至って庶民的な普通のスーパー、
の中の、コーヒー店だった。

そしてそこでコーヒー豆を何袋か買った。

「いつもは、同じ豆で熱いコーヒーもぬるいコーヒーも入れてるんですけど・・・
それだと、奥様がお飲みになるぬるいコーヒーは美味しくないと思うんです。
この豆だったら、低い温度で淹れても美味しいらしいので買ってみ
たかったんです」
「・・・」

なんで、花をこき使っている母さんのためにそこまでするんだよ。
第一今だって、同じ豆とは言え、わざわざ父さんと俺用のコーヒー
と、

母さん用のコーヒーを分けて淹れているんだ。
それでじゅうぶんじゃないか。

そもそも分けて淹れる必要もない。

ぬるいコーヒーが飲みたいなら、母さんは熱いコーヒーを自分で冷まして飲めばいいのに。

だけど花は、豆が入った袋を胸に抱き、満足そうな表情だ。

・・・こんな花が見れるなら、買い物の内容なんてどうでもいいか。

「もう一軒、寄ってもいいですか？」

「もちろん。どこに行きたい？」

「お花屋さんです」

「花屋？どうして？」

「大旦那様の仏前に飾る花を買いたいんです」

「・・・」

結局花は、自分の物は何一つ買わなかった。

花はこういう女なんだ。

家に戻った時には、既に日は暮れ真っ暗になっていた。

夏とは言え、少し肌寒い。

「今日はありがとうございました」

花がそう言って、助手席のシートベルトを外そうとした。

俺は、思わずその手を握ってとめる。

「雅人様？」

「あ・・・えつと」

もう少し花と2人で話していたい。

そういう思いで花の目をジッと見た。

花も分かったはずだ。

だけど花は俺の手を振りほどくと、「失礼します」と言って車を出て行った。

俺は助手席の窓越しに、小さくなっていく花の後姿を目で追った。

嫌がられた？

違う・・・気がする。

花は、俺から逃げたんだ。

野波家の跡取りである俺から。

花は野波家の小間使いで、

俺は野波家の跡取り。

しかも、花を蛇蝎のごとく嫌っている野波家の嫁の息子だ。

もしかしたら、花も俺ともう少し話していたいと思ってくれていたかもしれない。

でも、そういうことをするには、俺達は立場が違いすぎる。

俺は一度瞬きをして、今度は助手席の窓に映る自分の姿を見た。

19歳にしては、小柄で色も白い。
子供の頃はよく女の子と間違われていた。

生まれつき、父親譲りのこういう容姿ではあるけど、
それに加えて俺は外で元気に遊びまわることがなかったので、こ
んな身体つきになった。

花みたいだ、と思った。

小さくて、細くて、色白で。

女ならこれくらいがいいかもしれないけど、
やはり男の俺としては複雑だ。

もつと男らしく逞しければ、とは思っけど、
そうなったとしても俺の人生は何も変わらない。

きつと俺の子供もこんな感じなんだろうな。

もしその子に半分花の血が混じっていたらどうだろう。

男の子にしろ女の子にしろ、ますます可愛い感じになるだろ
うな。

・・・何あり得ないことを考えているんだ、俺は。

だけど。

もし、今父さんが死んで、俺が当主になったら、

俺はもつと自由にしていいんじゃないか？

許婚とは婚約解消して、花と結婚しても、誰も文句を言えないん
じやないか？

・ ・ ・ ほんと、何考えてるんだ。
今日の俺はどうかしてる。

第4話 突然の自由

ある朝。

といつても、いつもの朝と変わらない朝。

既にダイニングテーブルにしている父さんと母さんに「おはよう」と挨拶し、

俺もいつもの自分の席に座った。

すかさず花が俺のところへ朝食を持ってきて、コーヒーを注ぐ。

「ありがとう」

「いえ・・・」

何か言いたげな花。

だけど何も言わずに、キッチンへと下がって行った。

俺はコーヒーを一口飲んで首を傾げた。

不味い訳じゃない。

むしろ、美味しい。

だけど、ぬるいのだ。

そう言えば、さっき花が持っていたポットは母さん専用のぬるいコーヒーが入ってるポットだった。

ハッとして、父さんのコーヒーカップに目をやった。
そこからは、湯気がゆっくりと立ち上っている。

・・・よかった。

父さんのコーヒーは間違わずにいつも通りの熱いコーヒーを注いだみたいだ。

いや、花は間違った訳じゃないのかもしれない。

昨日、一緒に買いに行ったコーヒーの味を俺にも味わってもらいたくて、

わざとぬるいコーヒーを出したのだろう。

今度は母さんを見てみる。

こちらにも、いつもと変わらぬ様子でコーヒーを飲んでいる。

いつもと違う、いつもより美味しい、とか気付かないのかな？
せつかく花が母さんのために用意したコーヒーなのに。

「・・・今日のコーヒー、いつもより美味しいね」

俺はそう言ってみただけ、母さんは「そう？」と言っただけだった。
ところが・・・

「確かに、ちょっと味が違うな」

え？

父さんがカップを持ち上げ香りをかいだ。

「いつもより、少し苦いな。豆を変えたのかな？」

いや、父さんのはいつもの豆だから。

全く、味の分らない人たちだな・・・

そう思った瞬間。

父さんの手からカップが滑り落ちた。

「父さん!？」

「あなた!！」

椅子から転げ落ち、胸を掻き毟る父さん。
・・・ただごとじゃない!

俺と母さんは、すぐに父さんの両脇に駆け寄った。
口の端から、泡をふいている。

「花!救急車!」

「はい!」

「父さん・・・父さん、しっかり!」

父さんは、目を見開いたまま口をパクパクし、
何かを言おうとした。

「父さん!何?父さん!」

俺は耳を父さんの顔に近づけた。

「え?何?」

だけど父さんは、何も言わないまま動かなくなった。

お祖父さんの時とは打って変わって、今度は重苦しい通夜になった。

まだ若く、村の実権を握っていた父さんの死。

村人からは恐れられていた父さんだけど、それでもやつぱり、その死は大きな衝撃をもたらした。

さすがに母さんも、悲しみに打ちひしがれている、というか、呆然としている。

そして俺は・・・実感がわからない。

お祖父さんが死んだ。

父さんも死んだ。

それだけでも信じられないのに、
加えて今日から俺は、この野波家の当主だ。

花のことを思い、それを望んだこともあった。

でも、まだ19歳の俺には村を運営するだけの知識も力量もない。
そのノウハウを俺に教えてくれるはずだった人も、誰もいない。

俺は・・・野波家は、岡部村は、これからどうしていけばいいんだ
ろう。

弔問客が帰り、俺は広間に父さんと2人きりになった。

父さん。

俺、どうしたらいい？

父さんがどんな仕事をしていたのか、俺は全く知らない。
誰に頼ればいいのかも分からない。

母さんや親戚の人はいるけど・・・俺、なんか一人ぼっちになった気分だよ。

「雅人様」

「花・・・」

喪服姿の花が1人、広間に入ってきた。
いつも黒い服を着てるけど、やっぱり喪服はそれとは違う。
心なしか、花が大人びて見える。

「あ・・・もう、旦那様とお呼びした方がいいですか？」

「いや、雅人でいいよ」

「わかりました」

花が俺の横に座り、父さんの遺影に向かって手を合わせた。

「旦那様のことは・・・お気の毒でした」

「ああ」

「これからは、雅人様がこの御家の当主様ですね」

「・・・うん、そうなるね」

自信ないけど。

でも・・・そうだ、俺はこの家の当主だ。

いつも考えてたじゃないか。

当主になれば、花をもっと自由にやらせる、って。

俺も・・・好きにできる。

「あの、」

花が申し訳なさそうに、口ごもる。

「何？」

「こんな時なんですが・・・いえ、こんな時なので、お話しておきたいことがあるんです」

その瞳は思いつめたように真剣だ。

俺はそれに逆らうことができず、花に促されるまま2階へと上がった。

廊下を歩き、行き止まりまできて花はようやく足を止めた。

あの開かずの間の前だ。

「雅人様。昔、この部屋の鍵を探してらしたことがありましたよね？」

「ああ・・・うん。でも誰も持っていなかったけどね」

あれ以来、この部屋に入るのは諦めたんだ。

花はそつと胸に手をあてた。

「嘘について申し訳ありませんでした。実は、この部屋の鍵は私が持っています」

「え？」

花が喪服の胸のボタンを2つ外した。

こんな時なのに、その中の白い小さな膨らみに、俺の胸は高鳴る。

が、俺の目はすぐに他の物へと惹かれた。

花の首にかけられた金色のチェーン。

それは胸の辺りまで垂れ下がっている。

そしてその先に、小さな古い鍵がついていた。

「これです」

「・・・これが・・・この部屋の鍵？」

「はい」

花が頷きながらチェーンを首から外し、俺に手渡した。

「どうぞ」

「・・・開けていいの？」

「雅人様の御家ですから。」

この鍵は旦那様から貰ったものですが、決してこの部屋には入るなと、言われました。

でも、その旦那様はもういません。雅人様がお入りになりたければ、そうなさってください」

俺は、手の中の鍵を見た。

これは、父さんが花に渡したものらしい。
そのくせ花に、ここに入っではいけない、と言った。

この部屋には一体何があるんだろう・・・？

正直、恐かった。

でも、好奇心に勝てず、俺はゆっくりと鍵を鍵穴に入れた。

鍵穴の中がさび付いているのか、指先に若干の抵抗を感じる。
だけど少し強引に鍵を奥まで差込んだ。

ガチャ・・・

鈍い音と共に、鍵が回る。

俺は花と一度顔を見合わせてから、扉をゆっくりと開いた。

第5話 花の秘密

部屋の中は真っ暗だった。

もちろんもう夜だから当たり前なのだけど、それとは違った闇がこの部屋を支配しているように感じた。

かび臭い匂いが鼻をつく。

手探りで電灯のスイッチを探して入れてみたけど、電球が切れているのか電灯はつかなかった。

花が壁を伝い歩きしながら窓に近づき、サッとカーテンを引いた。とたんに、月明かりが部屋の中に広がる。

俺はなんとなく後ろ手に扉を閉め、ゆっくりと部屋の中を見渡した。

死体が転がって・・・は、いなかった。
というより、何もない。

あるのは、古ぼけたカウチソファと、床に置かれた毛布だけ。
その他には、本当に何もない。

「なんだ・・・何もないじゃないか」

俺は胸をなでおろした。

ホッとしたのだが、少しがっかりしたのも事実だ。

が。

花は、窓を背に険しい表情で、ある一点を見つめていた。

その視線の先は、床の上の毛布だ。

「どうした？この毛布がどうかしたのか？」

俺は毛布に近づき、パツとそれを持ち上げた。

一瞬、下に何か隠されているのかとも思ったけど、別に何も無い。

「大丈夫だよ、花。何も・・・」

花の表情はまだ険しいままだ。

そしてその視線は、相変わらず俺が持っている毛布に向けられている。

「この毛布がどうか・・・うわ！！」

俺は毛布を床に投げ捨てた。

なんだ、今のは？

別に毛布から何か飛び出してきた訳じゃない。

毛布に何か・・・黒いものがついていたのだ。

それは俺の手にも少しついた。

自分の手を見ても、その正体が何かわからない。

思い切って、毛布を広げてみる。

すると、やはり黒いものが毛布にこびり付いていた。

「花・・・これは？」

花も知らないかもしれない。
でも、この部屋の鍵を父さんから渡されたということは、
何か花に関係あるのだろう。

花は両手を胸の前でギュツと握り締め、呼吸を整えるように深呼吸した。

「それは・・・血です」
「・・・なんだって？」

背筋を冷たいものが流れた。
死体こそなかったが、これが血だということは・・・
それもかなりの量だ。

「わ、私の・・・いえ、私の母の血です」
「え？」

花がゆっくりと俺に近づき、毛布をじつと見つめた。

「私はこの部屋で、この毛布の上で生まれました」
「・・・」

あまりに衝撃的な言葉に、俺の思考回路は止まった。

花がここで生まれた？
この家で？
この部屋で？

花は言葉を続けた。

「母は隣町に住んでいたのですが、偶然やってきた旦那様が母を気に入り、愛人にして・・・

やがて母は身ごもりました。それを知った奥様は、母に『おろしなさい』と迫ったのですが、

母は頑として聞きませんでした。旦那様はそんな母をほっておくことができず、

この家に連れてきて、この部屋で子供を・・・私を産ませました」

ちよつと待て。

花が父さんと愛人の子供？

じゃあ・・・

「俺と花は、腹違いの兄妹・・・？」

「そうです」

何より。

お祖父さんと父さんの死より、花がこの部屋で生まれたということより、

何よりショックだった。

俺と花が兄妹？

なんだよ、それ！

「母は、産後のひだちが悪く、私を産んですぐに亡くなりました。お葬式もあげられることなく、母の遺体は無縁仏として葬られたそうです」

「・・・」

「奥様にとって、私はもちろん面白くない存在だったと思います。」

この部屋に放置し、勝手に死ぬのを待っていたようですが・・・」

花はようやく笑った。

でもそれは、気持ちのいい笑顔じゃない。

少し皮肉が混じった、諦めの笑顔だ。

「私、意外としぶとかったみたいで、いつまでも大きな声で泣き続けてたらしいんです。

それで、それに負けた奥様が、小間使い達に私の世話をさせたんです。

『花』という名前も、その時適当につけられました」

「そう・・・だったのか。花はどうして自分の出生の秘密を知ってるの？」

「奥様が教えてくれました」

それは・・・教えたというより、身の程をわきまえろ、という母さんからの圧力だろう。

花が生まれたとき、俺は4歳くらいだったはずだ。

何も覚えていなくても、仕方ないかもしれない。

だけど・・・なんて罪深いことなんだ。

事実を知っていれば、俺は花を妹として、もっと堂々と大切にしていやってたのに・・・

そう、妹として・・・

俺を毛布を持ったまま、両手を握り締めた。

なんてことだ。

父さんはもちろん、母さんも全て知っていたんだ。

お祖父さんも当然、知っていたんだろう。

他の人は？

・・・村人は知らないだろうけど、
この家で働いていた小間使いなら、知っていたはずだ。

誰も・・・誰も、俺には教えてくれなかった。

やり場のない怒りに震えていると、
花がそつと俺の手を握った。

「雅人様。さつき、雅人様と私は腹違いの兄妹だと言いましたが、
あれは間違いです」

「・・・え？」

花が微笑む。

今度は、本当の笑顔だ。

いや・・・今までにみたことのない程、優しい笑顔だ。

「確かに私には、半分旦那様の血が流れています。でも、戸籍上、
私は旦那様の娘ではありません」

「それは・・・父さんが、花を認知しなかったっていうこと？」

当然そうだろう。

そんなの母さんが許すはずがない。
それに、花の母親も死んでしまった。

だけど、花は頭を振った。

「違います。そもそも私は存在しない人間なんです」

「え？存在しない？」

「はい。私の出生届は出されていません。つまり、私は戸籍のない子供・・・存在しない人間なんです」

「なっ・・・」

「私は今、15歳くらいなのですが、誕生日も分かりません。義務教育も受けていません」

「・・・」

確かに、花が学校へ行っているところを見たことがない。

いつも家にいて、働いていた。

俺は、それが当たり前すぎて疑問にも思ったことがなかった。

「花・・・ごめん」

花が目を見開く。

「・・・どうして雅人様が謝るんですか？」

「何にも気付いてやれなくてごめん。それに・・・父さんと母さんの身勝手を許して欲しい」

「そんな・・・雅人様はもちろん、旦那様も奥様も悪くありません」

「少なくとも、父さんは悪いだろ。愛人作って、身ごもらせて・・・挙句、ここで産ませて・・・花の出生届けすら・・・出していない」
「・・・」

花が黙って俺の頬に触れた。

その花の手を水が伝う。

・・・あれ？なんだ、これ？涙？

俺、泣いてるのか？

俺は思わず、花を抱きしめた。

第6話 待つてゐる

「この家は、改装して新しい村役場にします。今の村役場は老朽化が激しいですからね」

俺の言葉に、広間に集まった村人達が動揺する。

「あの・・・では、奥様と雅人様はどうするんですか？」

「俺と母は2人だけなので、どこかアパートでも借りて暮らします。ですから、小間使いは不要です。」

今、小間使いをしてきている人たちには新しく役場で働いてもらうつもりです」

また動揺が走る。

でも俺は、構わず続けた。

「あと、新たな試みとして『外を見る活動』を行いたいと思います」
「外・・・？」

「村の外です。それも隣町などではなく、もっと都会のことです。役場で働く人たちに、定期的に東京などへ行ってもらって仕事をしてもらいます。」

あと、学校の遠足や修学旅行も社会見学を兼ねて遠くへ行かせましょう」

「・・・」

今度は動揺ではなく、はつきりとした困惑が広がる。

わかってる。

若い村人に「外」を見せるといふのは、この村にとって致命的だ。

都会に憧れて若い人が村を出て行けば、この村は過疎化の一途を辿る。

そしてそれを止められなければ、限界集落になりやがては集落消滅ということになりかねない。

それでも。

「俺、やってみたいことがあるんです。みんなに村の外を見てもらって、都会の魅力を感じてもらいたい。

そしてその上で、『都会もいいけどやっぱり岡部村がいいな』と思つて、みんなが戻ってきてくれるような、

そんな村にしたいんです」

「・・・」

「無理だと思いますか？俺は思わない。この村にだっていいところはたくさんある。

もし、いいところが一つもない村なら、それこそ無くなってしまつてもいいじゃないですか。

でも岡部村は無くならない、俺はそう信じてます」

村人達が顔を見合わせる。

中に、数人だけ頷いてくれている人もいる。

「難しいのは分かってます。でも・・・例えば、観光客を呼べるような事業を始めるのはどうでしょう？

ここは温泉が出ます。隣町や都会にないような、この村伝統の食べ物なんかもあります。

観光客目当てにこの村の良さを殺してしまうことなく、それでいて、全国にこの村をアピールできるような、そんな方法を考えたいんです」

パチパチと小さな拍手が起こる。
でも大半の村人はまだ渋い顔をしている。

当然だろう。

今までこの村が大事に守ってきた事を、いきなりやめるとい
うのだから、
抵抗がないはずがない。

だけどこのままじゃ、どちらにしるこの村はもたない。
だったら、思い切りやりたいことをやってもいいじゃないか。
俺はこの家の、この村の当主なんだ。

俺が自信を持たなくてどうする。

俺は広間の端を見た。

そこには小間使いの女達が、ずらっと座っている。
彼女達にはこの話を事前にしてあるから、動揺はない。
でも不安はあるだろう。

だけど、彼女達が新しい生活を潤滑に送れるようにするのが俺の
仕事だ。

俺がハッキリとそう言ったので、彼女達はみんな納得してくれ
た。

ただ・・・その中に花の姿はない。

あの夜。

開かずの間に花と2人で入った、あの夜。

俺はあそこで花を抱いた。

血が繋がっていると知っていながらの行為に、後ろめたさがなかった訳じゃない。

だけど、俺と花には、あの時あすることが必要だった。

そしてその後、花は俺に、この家を出て行くと言った。

「雅人様とこうなったからじゃありません。私は、私の人生を生きたいんです」

「・・・もう、戻ってこないのか？」

「それは・・・分かりません。ここへ戻ってることが私の人生の中で必要ならば、戻ってきます」

もし花が「二度と戻ってきたくない」と言ったら、俺は花を引き止めただろう。

だけど花は、「必要ならば戻ってくる」と言った。

そこに、恨みや悲しみはなかった。

だったら俺は、それを待っていよう。

花が、この村に帰ることが必要になって戻ってきた時、

「ああ、岡部村に戻ってきてよかった」と心から思えるような村にして、待っていよう。

兄として、家族として、待っていよう。

「反対意見があるのはわかってますから、それは後で聞きます。もし、他に何かやってみたいことがある人がいれば、言ってください」

すると、意外な人物がおずおずと手を上げた。

一番後ろで、ポツンと座っている少しぼっちゃりした女性。

俺の許婚だ。

「朝子^{あすこ}さん。どうぞ」

「あの・・・さつき雅人さんは温泉と言いましたが、温泉街にできるほど湯量があるとは思えません」

「うん」

「それに、ここに今から温泉旅館を新しく建てるのも大変です」

「うん」

「ですから、個人のお家を民宿のような形にして、お客様に泊まってもらうのはどうでしょうか？

お部屋の一つを客室にして、お風呂も温泉が出るように改装して。一つのお家に一日一組のお客様でしたら、融通も利いて、お客様の要望に応えやすいと思うんです」

「・・・うん。なるほど」

更に、朝子さんは付け加えた。

「でも、それより何より、一番大切なのは交通の便の確保だと思います。

村人が外に行くにしても、外からお客様を呼ぶにしても、今の岡部村は不便すぎます。

一番いいのは、村に電車が来ることですけど・・・それはさすがに無理だと思います。

ですから、岡部村と大きな駅との間にバスを通す、と言っのはどうでしょうか？」

「・・・」

驚いた・・・のは、俺だけではないようだ。

朝子さんは、普段人前で余り話さないし、ましてやこんなことを考えてるなんて・・・

でも、筋は通ってる。

岡部村の長所と短所を踏まえていて、更に現状もしっかり分かっている。

「ありがとう。その通りだと思う。よし、その辺から手をつけるか。交通担当と民宿担当にわかれて、もうちょっと細かく練ってみよう。やってみたい人はいますか？」

さすがに勢いよく、ハイハイと手は上がらない。
それでも、興味がありそうな村人が何人もいる。

・・・うん、大丈夫そうだ！
やれる気がする！

この村を、村人にとっても村人以外にとっても、魅力ある村にしてやろう。

そしていつか花に「素敵な村になりましたね」と言わせてやるんだ。

俺は、村人の目の輝きを確認しながら、担当を振り分け始めた。

第7話 始まり

バスに揺られてようやく辿り着いた駅のトイレで、私は小さな紙の包みを広げた。

小麦粉のような、白くてサラサラした粉。

ほんの数グラムで、人の命を奪うというそれを、私は便器の中に流した。

トイレを出て、包み紙もゴミ箱に入れ、辺りを見回す。無人駅なので駅員はもちろん、他に乗客の姿もない。

次の電車が来るまで後20分。

私はベンチに腰を下ろした。

もう一度、目を左右に向け、本当に誰もいないか確認する。

・・・いない。

なんだ、やっぱり来ないじゃない。よかった。

うつん、来てくれなきゃお金をもらえないから困るんだけど、それでもあの怖い男ともう一度会わないといけな気がする、気が重かった。

だからいなくてホッとした。

あの男・・・

恐いと言っても、見た目がいかにも恐い、という訳じゃない。なんて言うか・・・目が冷たい。

睨まれるだけで、殺されてしまいそうな気になる。

大旦那様のお通夜の日。

喪服姿のあの男に私は声をかけられた。

村で見たことのないその顔と、ただならぬ雰囲気ですぐに普通の弔問客じゃないことは分かった。

何故か男は、私が周りから浮いていると感じたらしい。

そして、こいつは使える、と。

男は私に紙包みを渡してこう言った。

「金が欲しいんだろ？ だったら中の粉を、この家の当主の飲み物に混ぜるんだ」

私が、この粉は何かと訊ねたら、男は口だけでニヤツと笑って、

「知りたきゃちょっと舐めてみな。ま、知る前にあの世行きだけだな」と言った。

男の目的は、大方の予想はつく。

雅人様は知らないみたいだけど、岡部村の土地はゴルフ場だかなんだかの開発計画に入っていて、

多分後何年かしたら、物凄く高い値がつく。

男はそれを知っていて、岡部村を手に入れたいんだろう。

たまたま大旦那様が亡くなり、旦那様が名実共に当主となった。

今、旦那様が亡くなれば、次の当主はまだ若くて何もできない雅人様だ。

だから男はこのチャンスを逃さず、旦那様の殺害を謀った。

旦那様さえいなくなれば、雅人様など赤子の手をひねるも同然だ。

・・・まあ、赤子でもなかなか死なないこともあるけど。私みたいに。

とにかく。

男の望み通り、旦那様は死んだ。

後のことなんて、私が知ったことではない。

「そら」

「！！！！」

いきなり膝の上に、分厚い封筒を投げられ、私は飛び上がるほど驚いた。

見上げると、いつの間にかあの男が、またニヤついた口元で私を見下ろしていた。

その目は、やはり人を射るように鋭い。

黒い髪に黒いスーツ。

歳は30ちょっと位だろう。

夏だと言つのに、この男の周りだけ空気が冷たい。

「約束の金だ」

「あ……ありがとうございます」

喉の奥がヒリヒリして、まともな声がでない。

「上手くやったもんだな。誰も怪しまなかった」

「……」

「で、相談がある」

来た。

私も馬鹿じゃない。

こうなることくらい分かってた。

「もう1人、殺って欲しい奴がいる」

男はそう言って、私の膝の上にある封筒の上に、一枚の写真を置いた。

車の後部座席に乗ろうとしている、1人の男の写真だ。

「取り合えず、そいつがいる東京へ行こう。銃の使い方も教えてやる」

「銃？」

「ああ。そいつはちょっとガードが固くてな。今回みたいに飲み物に薬を混ぜるのは難しい」

「……」

「お前がこいつの愛人にでもなれば、そのチャンスもあるだろうが。まあ、手段は任せる」

「……」

断れば、私も殺されるだろう。

それに、私には旦那様を殺したという弱味もある、と、この男は思ってる。

この15年、奥様は私に辛くあたってきた。でもそれは仕方のないことだと思う。

奥様からみれば、私は夫と愛人の娘。

面白いはずがない。

だから、奥様を恨んだことはなかった。

だけど・・・旦那様は許せない。

私の母を身ごもらせ、無理矢理家に連れ込んで私を産ませた。

そのくせ、奥様に頭が上がりず、出産で身体の弱った母を放置してあの部屋で死なせた。

奥様に辛くあたられている私を見ても、助けようとしめない。

雅人様は、旦那様のことを「頼りないけど優しい人だ」と思っているみたいけど、とんでもない。

あれはただ優柔不断で流されやすい馬鹿な人間だ。

あんな人、父じゃない。

心ある人間じゃない。

私はずっと旦那様を恨んできた。

だからこの男に、お金と引き換えに旦那様の飲み物に毒を入れると言われて、

その条件を簡単に飲んだ。

そして、毒のきつい匂いを誤魔化すために、私はこれをコーヒーに

混ぜることにした。

だけど、コーヒーはいつも、旦那様の目の前でポットからカップに注ぐ。

その間に毒を入れるチャンスはない。

となれば、最初からポットに毒を入れておくしかないけど、そうになると、今度は雅人様のカップにもそのコーヒーを注がなくてはいけなくなる。

雅人様は、世間知らずのお坊ちゃまだし頼りないし・・・だけど、悪い人じゃない。

いつも私のことを気にかけてくれた。

私がこういう人間か、想像できないほどにお人好しだった。

だから、巻き込みたくなかった。

悩んだ末、私はわざと奥様用のコーヒーを雅人様のカップに注いだ。前日に、奥様用にいつもとは違う豆を買っていたので、

雅人様も、私がそれを雅人様に味わってもらうためにわざと間違えたのだと思ったようだ。

本当に、呆れるぐらいのお人好しだ。

それなのに、私は結局旦那様のコーヒーに毒を入れることができなかった。

どうしてなのか、自分でもわからない。

ただ手が震えて、どうしてもできなかった。

諦めて毒が入っていないコーヒーを旦那様のカップに注いだけど、緊張していたせいか、コーヒーをいつもより濃く出してしまい「苦い」と言われてしまった。

そして、旦那様は本物の心臓発作を起こし、亡くなった。

やっぱり悪いことをした人間は、毒なんか盛らなくても天罰が下るんだ。

そう思った。

でも、それと同時に少しだけ、最後に飲んだのが、淹れるのに失敗したコーヒーだったなんてかわいそうだな、とも思った。

「やってくれるな？」

男が、有無を言わせぬ口調で言った。

「お金はくれるの？」と言って反抗するのが精一杯だった。

「もちろんだ。今回の倍、出そう」
「・・・」

私は膝の上の分厚い封筒を見た。

これの倍？

それだけあれば、当分生活には困らないだろう。

今度は、その封筒の上の写真に目を移した。

若い男だ。

私の目の前にいる男と同じような冷たい目をしているけれど、

それでいてどこか雅人様のような人情味がある。

そう、雅人様のような。

あの夜、私はどうかしてた。

どうして雅人様を拒めなかったのか・・・

でも、不思議と後悔はない。

むしろ、これから一人で頑張っていかなくては、と覚悟を決めることができた。

男は、私の沈黙を「YES」と受け取ったのか、満足そうな声で言った。

「電車が来たぞ。さあ、行こう」

—— 「ある少年と少女の物語」 完 ——

第7話 始まり（後書き）

最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました。
この小説はタロウお得意（？）の本編先行型番外編です。
本編連載は・・・まだだいぶ先になりそうですが、
もしよろしければ、そちらもお読み頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9750k/>

ある少年と少女の物語

2010年10月10日18時01分発行